
俺の周りは変と恋ばっか！

杏 代瑞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の周りは変と恋ばっか！

【Nコード】

N3069Y

【作者名】

杏 代瑞

【あらすじ】

口は悪いが平凡な高校生『水無月裕哉』は、常日頃から彼を取り巻く友人によつて振り回されていた。

そして、一部の人達にとつて待ちに待った性転換者や異性装者を保護する法律『TGSV保護法』が施行され、最早歯止めの聞かなくなつた友人達の行動は更にエスカレート！

幼馴染の男の娘が、お嬢様だが異常趣味の少女が、イケメンだが淡々と裕哉を狙うゲイの友人が裕哉を取り合う！

果たして裕哉は無事高校を卒業することが出来るのか！？ 主要登

場人物は100%変人という変&恋愛コメディ作品（笑）

（話によってはR-18に近い描写も出てきます。苦手な方はご注意ください）

完全なINKINKI作品です。変態？ 不定期更新？ だから何？w

第1話『新生活の朝』

「うーん……」

近くで目覚ましっぽい音が鳴ってる……というか目覚ましの音だ、止めないと。

『起きないとぶちこむぞー！』とか言ってるが目覚ましには違いない、うん。

つか、普通『起きないとぶつ殺すぞー！』とかじゃねえの？ 『起きないとぶちこむぞー！』って何よ？

それはいいとして、さつさと止めるか……。

「そーれ、ぼちつとな。って、ンだよ。まだこんな時間じゃねえか……」

今日まで春休みのはずだからな。寝よ寝よ……。

と、俺は目覚ましを放り捨ててまた布団に潜り込もうとしたが、

『さつさと起きねえとテメエの菊。にぶち込むぞゴラァー！』

「んな目覚ましがあるかゴラァー！！」

いきなり態度を豹変させた目覚ましに俺の熱い拳がヒット！
哀れにも目覚ましは爆砕、四散してしまった！

「あ……目覚まし壊しちゃった。どうすっかな」

まあ、ただ地面に落として電池が外れちまったただけなんだが。

今日はまだ春休み↓ずっと寝ていられる↓そんなに寝て大丈夫か？
↓大丈夫だ、問題ない

結論——このままでも問題なし。

「ンじゃ、おやすみーっと」

今度こそ布団に潜ろうとしたが、またしても俺の眠りを妨げるヤツの足音が。

ソイツは俺の部屋の前に止まると、ノックを二回して部屋に入ってきた。

入っていいくらい聞けよ……マナーがなってるぞ。

「裕兄さんー？ 起きてるー？」

ソイツは女だった。というか、俺の知ってるヤツだった。そりゃそうだ。毎日顔を合わせてるからな。

「Zzz……」

「裕兄さん？ まだ寝てるかなー？ 寝てるなら起こすよー？」

さて、皆さん。ここで俺はどんな起こし方をされるでしょうか。甘〜い展開を期待した人も多いと思いますが、コイツはそんなヤツじゃないのです。

「えーい！ 雪流ダイビングボディプレスッ！！」

「んぎゃああああああ！！」

わざわざ助走をつけて俺の腹に飛び込んできた雪の手が、俺の敏感な場所にクリーンヒット！

ダイビングボディプレスに合わせてダイビングフィストをかましてくるとは……やるな、我が妹よ。

「起きた？ 裕兄さん」

「お、起きたが……息子に拳を落とすのはやめてくれ……」

「ごめんねー。でも、こうでもしないと裕兄さん起きないでしょ？」

悪びれた様子もなく笑う我が妹。

コイツは水無月雪。みなづき すずき俺こと水無月裕哉の妹で年は一つ下の16歳。

兄の俺から言うのもなんだが、年頃だというのに「おてんば」を地で行くような娘だ。

可愛い妹ではあるが行動は破天荒そのもので、コイツを制御出来る人間は俺の知る限りではたった一人だけだ。

「て、ヲイ……なにヒトのズボンずり下げてやがる！？ こら！

てのひらでさするんじゃないやねえ！！」

「なにつて……そのままだと痛いかなーと思って。気持ちいいかな？」

「何ぬかしてやがる！？」

……訂正しよう。「おてんば」+「天然ボケボケ娘」だ、コイツは。

「やめんかい！！」

パンツに手を掛けようとしていた雪の手を無理矢理掴む。

このままコイツの思い通りにさせてたらパンツまで脱がされてしまっわ！

「えー」

何故か心底残念そうな顔をする我が妹、雪。そんなに見たかったのか！？

「えー、じゃない！　ところで雪？　なんでまたこんな早い時間に起こしに来たんだ？　今日はまだ春休みのはずだろ？」

雪の格好は学校行きの私服姿だった。

余談だが、俺達が通っている高校は正式な式典以外は私服OKだ。まったく、今日は休みだったのに変なヤツだ。と、思っていたのだが――

「……え？」

「え？」

「真似しないでよ……。勘違いしてるみたいだけど、今日から新学期だよ？」

「なにイー!!」

急いでカレンダーを確かめると、確かに今日から新学期だった。勘違いしてたのは俺のほうだったようだ。

「だからね？　裕兄さん、早く着替えないと朝ご飯抜きで学校行くはめになるよ？」

「おおう、それはいかん」

朝飯は一日の活動源だ。抜いたら今日は睡眠学習のフルコースをすることになっちまう。

今日は始業式なので授業はないのでは、とかそういうことは言っていない。

俺は急いで着替えようとしたが、雪のヤツは立ち去ろうともしないで手をわきわきさせている。

「あのさ、雪？　そこにいられると着替えられないんだが？」

「ん？　着替え、手伝ってあげようかと思って」

「いいからさっさと出ていけえ！！」

「きゃー」

俺が怒鳴ったのにも関わらず、雪は嬉しそうに笑いながら階段を降りていった。

まあ、どうせ俺がなに言っただって聞きやしないし。

ちよっぱやで着替えて持ち物を確かめる。といっても今日は授業もないはずなんでカバンの中に入れるのは筆記用具とノート、それに鉄板くらいだろう。

「よし、いくか！」

全ての確認を終えた俺は、階段を降りてリビングへと向かった。

第2話『元ヤンなお母様』

「ヒヤッハー！！ 朝飯だぜえ——おごお——！」

景気付けに世紀末モヒカンの真似をした俺の額に何やら固いモノがヒット！

床に落ちる前にキャッチしたそれは黄色いレモン。かじってみたら当然酸っぱい。

良い子のみんなは真似しちゃいけません。輸入モノは発ガン性のある薬が塗ってあるらしいからな。

「いきなり何しやがる！ お袋——！」

「ああ！？ アンタが悪いんでしょうが。朝っぱらからくだらない真似してんじゃないよ。ほら、さつさと朝ご飯食べな——！」

言いながらもテキパキと朝食を並べていく金髪のババア。

ちなみに雪のヤツは既に半分食べ終わっていて、楽しそうに笑いながらこちらを見ている。

「いい年していつまでもパッキンにしてんじゃねーよ（ボソッ）」

「……ほう？ そんなに早く死にたいのかい？」

「……いえ、私が悪うございました。何卒この卑しい私めに朝餉をお恵み下さいまし」

即座に引き下がる俺。お袋の両手には使い込まれたメリケンサックがはめこまれていたからだ。

さすが元ヤンキー。迫力満点だぜ……。しかもタダのヤンキーじゃないからな……。

「よろしい。ほら、早く食べないと間に合わなくなるよ」

「へいへい……」

適当に返事して雪の隣の椅子に座る。

この金髪の女性は水無月^{みなづき}濤恵^{なみえ}。苗字から分かる通り、俺と雪の母親だ。年齢は……言ったら間違いなくスマキされる……怖ええ人だし。

なにしろ若い頃は全国制覇を成し遂げた有名な暴走族『神風夜叉』のレディースの総長だったらしい。そんじょそこらのヤンキーとはわけが違う。

今でも金髪だし、部屋には当時着てた特攻服やら武器やら置いてあるし、怒らせるとメリケンサックや特殊警棒の一撃が飛んでくる。防犯グッズとして売られてるようなパチモンじゃねえから、これがまたとんでもなく痛えんだ……。

「そういえば、お袋。親父がいないようだが？」

「父さんはさつさと会社に行ったよ。何でもやることあるんだとさ」

「そか。まあいいや。いただきますーす」

親父の紹介なんか後でもいいか。それよりも今は朝飯だ。

今日の朝飯は、と……銀シャリに目玉焼きにみそ汁に沢庵に……
おおっ、納豆があるじゃねえか！

「裕兄さんは納豆好きだもんねー」

「おう！ 納豆をN A T T O Hと書いてしまっくらい好きだぜ！」

早速練って飯に掛けてかつこむ。からしは入れない。納豆にはからしを入れない、それが俺の信条だ。

『——先日施行されたTGSV保護法。それから一日経った街の様子を安田リポーターに伝えてもらいます。現地の安田さん？』

最近よく耳にするようになった言葉が聞こえてきて、俺達は思わずテレビの画面に目を向けた。

「あー、そういえば昨日施行されたんだったねえ。まあ、ノーマルなあたしらにとっては関係ないさね」

「そうだねー。あ、でもみさちゃんも喜んでるかも？」

「ああ、あのコはそうだろうねえ。そこんとこどうなんだい？ 裕哉」

「おおむね、お袋達の予想通りだよ……」

まあ、これが施行されたところでアイツが何か変わるわけでもねえしな。俺を常に振り回すような奴だし。

テレビの中では、リポーターが忙しそうに街の様子を伝えている。確かにそれっぽい奴らが増えた気がするが気になるほどでもない。

そもそも、2年前に同性愛（これは元から個人の自由だが）と同性婚は法的に認められている。そして今回施行された法律で残りの奴らが法的に認められたってだけの話だ。

俺はよく知らんで詳しくは言えないが、なんでもTS、TG、TVといった奴らのための法律らしい。性転換者や俺の周りにいるアイツらのような異性装者のためのものってことだ。

ただ、TVに関しては少し厳しくて「行為をするに当たって出来る限り美化すること」になっている。ようは、どこぞのおっさんが

すね毛も剃らないままスカート履いたり、化粧をしないままひげボーでしたりするのはNGってことだ。当たり前のことだが、著しく公序良俗に反する格好もNG。パンツ一丁や水着で街中を闊歩するとか、まあ誰もやらんとは思うが。

ふと、盆の上の膳を見ると空だった。いつの間にか食べ終わっていたようだ。

「ふう、ごっそさん！ お？ 雪はもう食べ終わったのか？」

「とつくに食べ終わって学校いったよ。アンタもそろそろあのコが迎えに来るんじゃないかい？」

「おお……もうそんな時間か」

テレビの画面の左上を見ると、確かにそんな時間だった。

このままじゃ納豆臭いんで念入りに歯磨きしてツラ洗って、鉄板入りのカバンを持って玄関先に出た途端、待ってましたと言わんばかりに玄関のチャイムが鳴った。

「はいはい、今開けますよっとー」

ガラガラツと引き戸を開けると――

「おはよっ、ユウ！ 早く学校いこ――ってなに朝から頭抱えてんの？」

「お前の格好のせいに決まってるだろうが……」

「んん？ これ？ お気に入りなんだけど、どこか変だったりする？」

そこには『不思議の国のアリス』から抜け出したアリス……もとい、俺限定のトラブルメイカーが立っていた。

第3話『その娘、アリスにつき』

「んじゃ、いつてくるわー……」

「いつてらっしゃい。裕哉、朝っぱらから辛気くさい顔してんじやないよ！ みさちゃんも気をつけていつといで！」

「はい、おばさん！ いつてきまーす！」

わざわざ玄関先まで出てきたお袋に見送られて「ZU・N」と家を出る俺と、青色のリボンに水色のワンピースの上からフリル付きのエプロンドレスを着た、髪色以外はどこからどう見てもアリスにしか見えない奴。

コイツの名前は神無月美里。かななつき みさと俺の悪友で親友で幼馴染。女みたいな名前だし今も女の格好をしてるが、コイツは女じゃない。いわゆる『男の娘』ってヤツだ。

まあ、実際美里は女顔ってか女にしか見えねえし可愛い奴なんだが、俺に対する行動はマジでハンパない。朝起きたらコイツが横で寝てたとか、そんなことも多々あったりする。

ちなみに美里の家は俺の隣。ひさし伝いにお互いの家を行き来出来る仲だ。

そんなこんなで俺限定のトラブルメイカーな奴ではあるが、根は悪い奴じゃないので好きにさせてる。

「ユウ、本当に辛気くさい顔してるねー。そんなんじゃ幸せが逃げてくよ？」

「あー……半分はお前のせいで、あと半分は気分的な問題だ。ほつとけ」

「え？ やっぱ僕のせいなの？ これ、そんなに变かなあ……お気に入りのに」

と残念そうに言つて、その場でクルリと一回転する美里。最後にポーズ決めて「キラッ」。

確かに可愛いけどさあ……そういう問題じゃねえんだっつの！

「いくら大っぴらに出来るつつつても、初日からそれはないんじゃないかねえか？」

「えー？ うちの学校私服登校オッケーだし、先生にもちゃんと許可取ったんだよ？」

マジで許可下りたんかい……。

うちの学校は元から公序良俗に反してなければ私服登校OKだったんだが、男装・女装したまま登校するのはNGだった。

が、例の法律が施行されてからは電話で「許可を取れば異性装したまま登校しても良い」という連絡があった。

いつも思っんだがうちの学校、校則甘すぎだろ……。

「つか、美里」

「ん？ なーに？」

「そんな格好で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。まー、ユウが言いたいことを察して答えるけど、僕は似合ってると思うし、見たい奴は勝手に見ればいいんだよ。それに——」

「それに？」

「僕がこういうの好きだったのは、もう学校中のみんなが知ってることだろ？」

「ああ、確かに……」

思い出話になるが、あれは去年の夏くらいのことだ。

何故かは知らんが美里が女装、もう一人の奴が男装のまま学校に来て大騒ぎになったことがあった。

そのもう一人の奴は男装するような奴じゃなかったんだが、俺の悪友その3によれば「何かで張り合っていたんじゃないでしょうか」という意味不明な理由からだった。

結果、二人ともめでたく三日間の停学。この一件で美里の女装好きが全校生徒に知れ渡ってしまったわけだが、コイツは全く気にしねえどころか、それすらも計画通りと言わんばかりに行動をエスカレートさせてきやがった。さすがに女装したまま登校するのは、今日まで二度としなかったが他の面でだ。

「まあ、美里がそれでいいってんなら好きにしたらいいさ」

「うんうん、僕は僕のしたいことをするだけだよ。——えいつ！」

そう言っただけで美里は俺の腕に抱きついてくる。明るい栗色のミドルロングに少女のような顔立ち、華奢な体つき。何も知らない奴から見たらいちゃつく男と女にしか見えないんだろっな。

「ちょい重たいし、視線が鬱陶しいんだが？」

「えへへー、そんなの気にしない気にしない」

「はあ、もう好きにしろ。ところで美里……」

今聞くようなことでもないとは思っただけで、ついでなんで聞いとこっ。

「んー？」

美里が顔を上げる。シャンプーの匂いか、花の香りに混じって甘い香りがする。

その甘い香りを嗅いだと意識が飛びそうになるような……気の

せいだな、うん。

「もう一つの名前、なんつったっけな……」

「もしかして、『トランス・ネーム』のこと？」

「ああ、それだ。もう決めたのか？」

「うん、『アリス』にしたよ」

「さいですか……」

なんつか、まんまじゃねえか！ コイツらしい名前ではあるが、もう少し捻りするとかなかったのか！？

ちなみにトランス・ネームは例の法律の適用者専用のもう一つの名前のことだ。

別に法律で決めるようなものでもねえ気がすんだが、「対象者は行為をする時にのみトランス・ネームを名乗っても良い」ということらしい。美里の奴は「雰囲気作りのためだよ」とか言ってたっけな。

そんなことを話してるうちに大きめの交差点が見えてくる。美里が腕に抱きついてるから歩きにくいと思ったらねえんだが、それでも大分進んでたようだ。

と、俺のよく知っている姿の奴が左から歩いてくるのが見えた。黒のゴシックっぽいロングのワンピースという変わった服装の女だ。

「お、あれは……おい！ 睦月！」

ソイツは俺達の存在に気づくと慌てることなく横断歩道を渡ってから、こっちに向かってきて少しばかり古風な挨拶をする。

「あら、裕哉さん。ごきげんよう——むっ！—」
「むっ！—！」

が、まだ俺の腕に抱きついたままの美里を見た途端にソイツの目が鋭くなった。美里の目もいつの間にか鋭くなって、バチバチッという音が今にも聞こえてきそうだ。

そんな二人を見て、俺は心の中でこう言った。

——アーメン。

第3話『その娘、アリスにつき』（後書き）

次回で一先ずの役者が揃います。

第4話『見た目お嬢様とイケメンの優男』

おはよう、諸君。水無月裕哉だ。

早速だが、いま俺の目の前で二人の少女（片方は『？』だが）が睨み合ってる。

今にも殴り合いが始まりそうだが、この二人の場合は喧嘩は喧嘩でも口喧嘩。なんで、俺も止める気はなかったりする。

とりあえず、心の中でゴングでも鳴らしておこうか。それ、カーンとな。

「あーら、美里さん。そんなに引つ付かれていては裕哉さんが歩にくいのではございませんこと？」

どこぞのお嬢様を思わせる口調で美里を挑発する睦月。まあ、コイツだと違和感があんまねえよな……正真正銘のお嬢様だし。

「睦月ちゃんもおはよう。相変わらず黒ずくめでいかにも睦月ちゃんって感じだね！ それよりも、朝はまず挨拶から、じゃないのかなー？」

美里の反撃。つかこの二人、一見すると仲が悪いように見えるんだが、なんか楽しそうにやってる気もすんだよな！。喧嘩するほどなんとやら……って奴なんかね？

「それもそうですわね。ごきげんよう、美里さん。ぐぬぬぬ……」
「むむむ……っ」

お約束だが、何が「むむむ」だっ！

人通りも多くなってきたしそろそろやめさせるべきか、と思った途端にケツに妙な手触りを感じる。横を振り向けば「バリバリ現役でホストやってます」と言わんばかりのイケメンが俺の隣に立っていた。

「やれやれ、君たちは相変わらずですね」

「雅矢……そう言いながらてめえはなにひとのケツ撫で回してやる！！」

「おっと、これは失礼。ははは」

まったく、コイツは……油断も隙もあつたもんじゃねえな。

この二人——ゴシック調のロングワンピに腰くらいまである黒髪ロングストレート女とサラサラ髪 of イケメン男はそれぞれ九条院睦月、高橋雅矢。俺の悪友その2とその3だ。

睦月は名門『九条院財閥』のご令嬢。雅矢は普通の家の出らしいが見ての通りの日本人離れしたイケメン。だが、二人とも性格や性癖は多少（本人たちの名誉のためにこう言っとく）まともじゃない。なんでかってーと、睦月は蛙とかの解剖実験するたびに息が荒くなったり、みんなで焼肉屋に行けば内臓ばかり頼んだりする奴で雅矢は行動からも大体分かるように所謂『ゲイ』の男。コイツに誰かが「アッー！」されたって話は聞かないが、本人もそう言ってる。まあ行動はアレだが、二人とも俺の大切な友人だ。

「おはようございます、裕哉君。神無月君と九条院さんも。そろそろ時間ですし、一旦切り上げて学校に行きませんか？」

雅矢がそういうと、美里と睦月は同時に小さく溜息をついていつもの顔に戻った。おお、さすが雅矢。この二人のストッパーなだけ

はあるぜ！

「そうですね。それでは、早く参りましょうか」

言いながら睦月はひっそりと俺の左手を握る。

なんかコイツの手って冷たいな……冷え性か何かなんかねえ？

「うんうん——って！ なにちゃっかりユウの手握ってるんだよ！」

「これくらい良いではありませんか。あなたは右腕、わたくしは左手。何か問題がありまして？」

「むむむーっ」

「何がむむむだ！ ほら、さっさと行くぞ」

これ以上ここにいたらループしちまいそうだ。

「相変わらず賑やかですねえ。はっはっは」

雅矢、お前も言いながら今度は腰を揉んでんじゃねえ！

学校までの直線道路をわいわいがやがやと歩く俺たち。右には美里、左には睦月。後ろにはイケメン雅矢と普通なら裸足で逃げ出したくなるくらい目立ってる。

が、「悲しいんだけど、これって去年からのよね」ってことで嫌でも慣れてしまった自分がここにいる……。

「そつえば、裕哉さん」

俺を見た睦月の頬が何故か赤い……目も潤んできてるような気がする。sonだけになんか嫌な予感しかないが、とりあえず聞いてみることにするか……。

「ん？ なんだ？」

「今朝、活きの良い蛙を捕まえたのよ。早速、放課後にでも二人つきりで解剖してみませんか？」

「やらねえよ！ おい、さりげなくポケットからメスを取り出すんじゃない！ つか、学校に刃物持つてくんな！！」

「あら、ご心配には及びませんことよ。このメスはセラミック製で金属探知機にも引っ掛からない特注品ですよ」

「そういう問題じゃねえよ！！」

この女……メスを見てうつとりしてやがる。あぶねえ！！

「なんでしたら、裕哉さんの股間の鋭いメスでわたくしのほとを――」

「おーっとそこまでだ！ 朝っぱらからなにトチ狂ってやがる！ さっさと行くぞオラ！！」

「そうだよ睦月ちゃん！ そ、それにユウのはそんなメスみたいに細くないっ！」

「ほう？ 裕哉君のはそんなにビッグマグナムのですか。それは楽しみですな」

あああ！ なんかもう収集つかねえから引きずってでも連れてくわ――！

「ああ、裕哉さん……。そんなに激しくされてはわたくしはもう――」

「いいからお前はもう黙ってやがれっ！！」

そんなこんなで学校に到着。なんかいつも以上に疲れた気がするわ……。

睦月の奴はまだトリップしたまま。ますます変なこと言い出しそ

うだったんで、美里のカバンに何故か入ってたガムテープで口を塞いでやった。

またなんか変なことを考えてやがるに違いねえ……恍惚してる睦月をそのままに、俺たちは今年度のクラス分けが発表されるのを待った。

第4話『見た目お嬢様とイケメンの優男』（後書き）

この物語はKENZENものです

第5話『帰宅前も後も一騒動』

クラス分けの結果、俺たちは欠けることなく同じクラスになった。そのあと始業式でテキストにハゲ校長の無駄にクソ長い話を聞いて、今は放課後のホームルームの時間だ。

いくら変わった学校とはいえ、さすがに始業式から授業はやらない。ようするに『今日はこれで終わりだ。ヒヤッホーイ!!』ってことだ。ヒヤッホーイ!!

「よし、諸君！ 今日これで全て終わりだ！ 諸君も三年生になったわけだが、おれは諸君に厳しく勉強しろと言わん！ 勉強して良い会社や大学を受けるもよし。遊んで過ごすのもよしだ！ では諸君、帰って遊ぶがいい。フハハハハハハ!!」

言いたいことだけ言って颯爽と去っていく俺たちの担任。無駄にかっけえー。

「帝星先生は相変わらずだね」

俺の右隣の席の美里は帰り支度をしながら、今にも吹き出しそうなのをこらえてる。

担任の名前は帝星刺鵜醒^{みかどほし なつめ}。去年もだったが、今年もこの人が俺たちの担任だ。

すごい苗字と名前つーかどこぞの世紀末漫画に出てそうだが、思い切って本人に聞いてみたところ「ん？ おれとサ。ザーは無関係だぞ。尊敬してはいるがな。ワハハハハ!!」って返事が返ってきた。

ハチャメチャな先生だが、豪快な行動振りと威厳たっぷりの言い

方が面白いのか、生徒の人気は常にストップ高だ。

「そうだな。せっかくの半ドンだし、帰りにどっか寄ってくか？」
「うん。僕はいいけど、睦月ちゃんと高橋くんはどうするー？」

俺と美里が後ろを振り向くと、二人は帰り支度してた手を止めて俺たちを見た。余談だが俺の右隣が美里で後ろが睦月、右斜め後ろが雅矢の席だ。

あの先公め……今回は見事に四人固めてくれやがって。後でスーパーボールぶつけたらあ！

「良いですわね。わたくしは構いませんわよ。御付き合い致しますわ」

「残念ですが、私はこれから用事があつて……」

睦月はオーケーで雅矢は用事ありか。四人でどっか行きたい気分だったし、また今度にするか――

「そつかー。用事なら仕方ないね。また今度にする？」

と思つてたら美里がそのまま言ってくれた。

「そうですね。雅矢さんが大丈夫な時に致しましょう」

「すみませんねえ。それでは私はこれで。さようなら皆さん、また明日」

「おう、また明日な！」

「ごきげんよう、雅矢さん」

「またねーっ、高橋くん」

よっぽど急いでらしく、雅矢の奴は挨拶もそこそこに去ってい

った。

そういえば、アイツの家のことってあんま聞かねえな。何か事情があんのかねー？

「ンじゃ、帰んべー。……ん？」

カバンを持って立ち上がると、また良からぬことを考えてそんな目をした睦月が俺の右腕に抱きついてきた。

睦月よ……今度はお前か！

「んふふ。これで裕哉さんの右腕はわたくしのモノですわ」

おい、今なんか『モノ』の発音がおかしかったぞ！

「あーっ！ 睦月ちゃん！ そこは僕の特等席だよっ！！」

「あら、そのようなこと誰がお決めになったんですの？ 早い者勝ちですわ」

「むむむーっ！ じゃあ僕はこっち！」

「ぐぬぬぬー」

「何がむむむだ！ てか、二年の時もだったがお前らよく飽きねえな。ある意味感心するわ……」

突然口を挟んできたクラスメイト。「誰だっけ？ 名前分かんねえから仮にモブAとしとこう」、うん。

「ひでえ！ オレは吉岡だ！ 去年も同じクラスだったろうが！！」
「そうだったか？ まあどうでもいいや。おいお前ら！ いつまで俺の腕に引っ付いてやがる！？ さっさと帰んぞ！！」

怒鳴っても離れそうにねえから右腕に睦月、左腕に美里を引っ付

けたまま学校から出てやった。大分目立ってしまった気がするが今さらなことだ。

校門を過ぎてからまた睦月の奴がトリップし始めたんで、とりあえずカバンで殴っておいた。あ、そういえばカバンに鉄板入れてたっけ。なんか睦月の頭から星が飛び出てた気がすんだが……まあ見た目に反して丈夫な奴だから問題ないだろ。

「ばいばい、ユウ。また明日ねー！」

馬鹿話に花を咲かせてるうちに家についたので、家の前で美里と別れる。

「おう！ また——って明日は休みだぞ？」

「あ、そうだった。ねえユウ、明日遊びにいつてもいい？」

「ああ、いいぞ。明日は俺も用事ねえしな」

「ありがとっ！ じゃあ、また明日ねー！」

やけに嬉しそうにしながら、美里は自分の家に入っていった。いつものことだろうに……そんなに嬉しかったのかねえ？

ま、いいや。俺も家に入ろうーっと。

「T A T A T A ただいまーっ——おわあっ——！」

引き戸を開けた途端に飛んでくる丸い物体！ 間一髪よけて跳ね回ったそれを確認するとタダのスーパーボールだった。

へえー懐かしいな。小坊くらいまではよく見たんだが最近はめつきり……ってそうじゃねえ——！！

「お袋！ わざわざ待ち構えて息子にスーパーボール投げるたあ
どういう了見だ！？」

「チツ。避けたのかい。つまんないねえ」

今「チツ」って言ったよこのババア！

「まあ、あれだ。お昼のワイドショーなんざみるの、あたしに似合わないだろ？ ちょっとした暇つぶしさね。それでお昼はどうするんだい？」

「息子で遊ぶなよ…… あんま腹減ってねえから昼飯はいいわ。ん……」

脱いだ靴を靴箱にしまおうとして、見慣れたブーツを発見する。
これは…… アイツが来てるのか？

「お袋。今稜の奴きてんのか？」

「ああ、いるよ。今は上で雪と遊んでんじゃないかい？」

どうやら、アイツが遊びにきてるのは間違いねえようだな。つか、
アイツらHRサボってきたのか？

……あの稜のことだし、十二分にありえるのが怖えとこだ。

「……ん？」

2階に上がって自分の部屋のドアを開けようとした俺は、中に誰
かがいる気配を感じてドアノブから手を離れた。

誰だ？ 雪と稜が上にいるなら雪の部屋にいるはずだし、もしか
してボウドロか！？

なんてな。隣の部屋にいるんなら、分からないはずもねえよなー。
二人とも俺の部屋でなんかやってんのか？

何か話し声が聞こえてくるのでドアに耳をそばだててみると――

『あっ……お姉様っ……そこは……!』

『何イイ声上げてんだ? やっぱココがイイんだろ?』

『は、はい……そこがつ、気持ちいいんです……っ!』

『へへ、やっぱりな。雪はココが弱いもんな。アタイも燃えてきたぜ』

『あっ……んっ……お姉様あ……』

……えっ? なんぞこれえ――!!

第6話『アタイが高橋萩だ!』

えーと、これは所謂アレですか？ ドアの向こう側では百合の花が咲き乱れてるってヤツ？

ちくしょう……なんてうらやまし——じゃねえ！ やるならてめえらの部屋でやれよ!!

これは一度言っただけにやならんな。てなわけで百合百合ゾーンに突入するぜ！ ヒヤッハア——!!

「お前ら！ 俺の部屋でなにやって——ズコーッ!!」

部屋に入った途端に漫画のようなお約束のバナナの皮でも踏んだようにずっこける俺。

ベッドの上で雪に寝がまたがってる。ここまではそれっぽいんだが、奴らがやってたのはタダのマッサージだった……どうせそんなこったろうとは思ってたよ!

「お、裕哉じゃねえか。おひさ——」

「裕兄さん。おかえり——」

奴らは俺の気持ちなんざ知ったこっちやない様子で挨拶してくる。はあ……なんか疲れたし、どうでもいいやと俺はテレビの画面に目を向けてそのまま固まった。

『ああん？ 最近だらしねえな?』

「…………なあ、稜？」

俺、フリーズから復帰。

「おん？　なんだ裕哉？」

「別にマッサージする時にテレビやらビデオやらを見るなどは言わねえけどよ…………なんで『ガチムチパンツレスリング』なんだよ！！」

普通はリラックスさせるために『世界の景色』とか『Nice boat』とか流すもんだろ！？　いや、『Nice boat』は少し違つかもだけどさあ…………さすがにこれはないわ。

「ンなモン面白いからに決まってるだろうが。なあ、雪？」

「はい。でも、私はお姉様が良ければなんでも…………」

「ハハハ、愛いヤツだ。あとでたっぷり可愛がってやるからな」

「えへへー、お姉様あ」

子猫のように甘える雪を笑いながら撫でる稜。

精神が汚染されそうだからてめえらの部屋でやれ。この、ある意味バカップルがっ！！

「雪、お前もお前だ！　マッサージくらいでイヤラシイ声出してんじゃねえー！！」

「だって…………お姉様、力が強いから気持ちよくて、つい…………」

「まあアタイは力には多少自信があるからな！　ハハハ！」

…………そりゃあ、毎日毎日あんなぶつとい鎖を振り回してたら嫌でも力が付くでしょうよ。それで毎度毎度犠牲になる俺はたまったも

ンじゃないがな！

無駄にドヤ顔をしながら、レザーの上着のポケットから「タールもニコチンもヤバイ量です」と言わんばかりに『DEATH』と描かれた洋モクを取り出した女は高橋^{たかはし}稜^{りん}。苗字から分かるかもしれんが、俺の悪友である高橋雅矢の妹だ。

服装は上下レザー＋鎖やらシルバーで常にジャラジャラさせてる。言葉遣いは聞いている通りの男言葉で、美里とは逆の『男装娘』だったりする。

雪とは見たままの仲だ。雪は稜を実の姉のように慕っていて、稜は雪を実の妹のように可愛がってる。時々行き過ぎてる気がしないでもないが、俺が口出すようなことでもねえしな。

余談だが、稜とはあるバンドでギターを担当してたりもする。なんだっけな……そうだ、ヘヴィメタルとかデスメタルとかそんな感じのヤツ。

それはいいとして――

「稜、前にも言ったが俺の部屋は禁煙だ」

「チッ」

俺がライターを操作しようとしていた手を止めると、稜は舌打ちをしながらも素直に洋モクの箱をポケットに戻した。

俺は酒はやるが煙草はやらない。というか、煙草の臭いが苦手なんだ。よって、俺の部屋も当然禁煙だ。

「一服してから行こうと思ってたんだが仕方ねえな。そうじゃ、アタイはそろそろ行くわ」

「ん？今日はライブかなんかあるのか？」

「うんにゃ。ライブつか、本番前の練習があんだよ。メンバー全員が集まっからサボるわけにもいかねーしな。じゃあなー！」

「それなら仕方ねえか。またなー！」

「お姉様、またー」

「ああ、雪。明日アタインち来いよ。さっきの続きしてやつから」
「あつ……。はい、お姉様……」

最後にウインクを決めて羨は部屋から出ていった。つか……本当にマッサージだったんだよな？ それにしては雪の顔がゆでダコのようになってるんだが……。

俺がそのことを雪に聞いただと――

「えつ……。や、やだあー裕兄さんつたらあ――!!」

「ちょ、おま！ それ中に鉄板が入って――ぎゃあああああああ
ああ!!」

照れ隠しのあまりに暴走する雪に撲殺されかけました。これが俗に言う『満身創痍』って奴だな。マジで痛えわ……。

鉄板入りのカバンはすげえ危険みてえだから、良い子のみんなはマネすんなよー!?

その日は午後の出来事以外は特に大したこともなく過ぎていった。一つだけ言えば、風呂場行ったら親父がマッパでポーシングしてて「ん？ 裕哉か。たまにやー一緒に入るか？ ハッハッハ!!」とか抜かしやがったんで、とりあえず手加減なしで延髄斬りかまして浴槽に沈めてやった。

日付が変わった直後くらいに部屋に戻って着替えて電気を消してベッドイン！ 今日のもうやることもねえし、さっさと寝ちまおう。

「ふああー、今日も疲れたぜ……おやすみー」
「おやすみー」

……どっからか声が聞こえてきた気がすんだが多分空耳だろう。
根拠はねえが、なんだか良い夢が見れそうだ。そう決め付けて俺
は毛布を被ると、すぐに眠りへと落ちていった。

第7話『THE 不法侵入』

「ん……」

寝起きのためか、耳元で聞こえるスズメの鳴き声と、瞼ごしに感じる日差しに俺は目を覚ました。

結構疲れてたらしく、ぐっすりと眠れたようだ。良い夢は見れなかったが、これはこれでいいことだ。

「今、何時だ……？」

机の上に置いてある目覚まし時計（今度はまともなヤツ）で時間を確認するために首ごと顔を左に向けると――

「すうすう……」

「……なんでお前が隣で寝てやがる？」

いつの間にきてやがったのか、美里の奴が幸せそうなツラしながら寝息を立てていた。

そっぴい、寝る前に誰かの声が聞こえた気がしたっけな……まさか、あん時からもういたのか？

つか、俺確かに鍵かけたよな……？ それを考えると……美里、なんて恐ろしい子っ！！

「……ま、いいか。今に始まったことじゃねえし」

目覚まし時計を確認すると、後2時間は寝ても問題なさそうな時間だったので再び寝ようとした俺はあることに気づいた。

……なんか狭くね？ なんつーか、こう……反対側にも誰かが寝てやがるような……。

右に顔を向けて、今度こそ俺は固まった。

「んっ……いけませんわ裕哉さん。そのようなこと……ふひひ。すやすや……」

なんつー夢見てやがる！！ つーか、なんでお前がこの家にいやるっ！？

美里はまだいい。家が隣同士だし、ひさし伝いに行き来出来るからな。だが、睦月。てめえは駄目だ！

「……ていつ」

背中を持ち上げてそのまま転がしてやると、漫画の一コマのように睦月の奴は転がっていつてそのままベッドから転落した。「ゴキッ」って音がした気がするが睦月のことだし多分大丈夫だろ。

「痛っ！ もう……一体何なんですの？」

ほらな。

「おはよう、睦月。とりあえず、なんでここにいるのか聞かせてもらおうか」

寝起きとは思えないくらいの笑顔でいう俺。ただし、指をパキパキと鳴らしながら。

「あら、おはようございます裕哉さん。何でって言われましても……きちんと玄関からお邪魔させていただきましたわ」

「ほう？ 玄関ねえ……。鍵が掛かってたはずなんだがなあ？」

「ふ……このわたくしの七つ道具のひとつである『ぴっきんぐ・つーる』というものに掛ければ、鍵のひとつやふたつ——」

「睦月。ひとついいことを教えてやろう」

「はい？」

不思議そうにしながらベッド端に寄ってきた睦月に俺は大声で言
つてやった。

「それは不法侵入って奴だああああああ……！」

「ぐええええ！ 裕哉さん首絞まってますわ！！ ギブギブううー
ー！！」

「おおつと水無月選手！ ここでチヨークスリーパーだあ！！ こ
れは苦しい！ 九条院選手耐えられるかあ！？」

「なんでプロレスの実況風なんですの！？ ギブ！ ギブしますわ
ー！！」

「なあ、この試合はギブアップ無効となっております。あらかじめ
ご了承ください」

「後告知なんてひどすぎますわー！！」

なんてことをしているうちに、ようやく美里の奴が目を覚ました
ようだ。

「おはよ、ユウ。……さっきの音はなーに？」

プロレスもどきじゃなくて音のほうかよ！ しかも反応おそすぎ
っ！！

「気にすんな。もう起きるならさっさと下いって顔でも洗ってこい」
「んう……起きる。あれ？　なんで睦月ちゃんがここにいるの？」
「タダの不法侵入だ。後で逆さ吊りにしてやるうと思ってるんだが、美里もやるか？」

「え……？」

「うん、やるー。家からバナナガード持ってくるねえ……」

駄目だコイツ。まだ寝てやがる……早く起こしてやらんと。マジで家戻ってバナナガード持ってきてかねん……。

美里は非常に寝起きが悪い。寝惚けてる時のコイツはなにするか分かったので早めに目を覚ましてやる必要があるのだ。

「いいからさっさと顔洗ってこい」

「んにゅ……」

俺が指さすと美里はぬぼーとした動きでドアを開けて階段を降りていった。

代わりに下から上がってきたお袋が顔を見せる。

「裕哉、さっきみさちゃんが上から降りて——おや、睦月ちゃんも一緒だったのかい？　二人とも相変わらずだねえ」

にやにや笑いのお袋。けっ！　ババアがにやついてもキモいだけだっつの……——すみません、めっさ怖いんで特殊警棒取り出しながら殺気を叩き付けないでくださいマジで。

「はい、濤恵小母さま。ご無沙汰しております」

睦月の奴は既に復活していた。相変わらず見た目に反して頑丈な奴だ。

「どうだい？ 睦月ちゃんも朝ごはん食べてくかい？」

「そうしたいのは山々なんですけど……今日はこれから妹と遊ぶ約束がありますの。またの機会にお願い致しますわ」

睦月の妹かぁ。いるのは知ってたが会ったことどころか名前すら知らねえんだよなあ。睦月の奴はその辺のこと話したくねえみたいだしょ……。ま、急いで聞かなくてもそのうち話してくれるだろ。

「そうかい？ それじゃあ仕方ないねえ。裕哉、アンタも仕度してさっさと下りてきな」

そう言ってお袋は下に降りていった。

顔を見合わせる俺と睦月。さっきのプロレスもどきの続きでもいいんだが、ここはひとつ聞いてみることにするか。

「なあ、睦月」

「はい、何です？ 裕哉さん」

「お前……結局なにしにきたの？」

「何って……裕哉さんの隣で寝ただけですけど？」

マジでそれだけかよっ！！ コイツんちと俺んち、どんだけ距離があると思ってるんだ！？

「そうですわねえ。裕哉さんのご希望とあらば、ベッドの上のプロレスごっこでも——」

「やらねえよ！—」

第7話『THE 不法侵入』（後書き）

不法侵入は犯罪です。ダメ、絶対！

第8話『いつもより騒がしい朝飯』

「あれ？ 睦月ちゃんは？」

「うつせえから逆さ吊りにして放置してきたわ」

「うわあ……本当にやったんだ。ユウってば鬼畜……」

んな簡単に信じんなよ……。これが街中なら知らねえ場所に連れていかれてンぞ？

「冗談だ。なんでも妹と遊ぶ約束があるらしくてな。さつき帰った」
「そうなんだ。全然気がつかなかったよ」

そりゃ奇遇だな、俺も気づかんかったわ……。戸を開ける音も聞こえなかったし、アイツのご先祖様はN I N J Aか何かか！？

あの後、睦月の奴は薄くて黒い服（多分、寝間着代わりだ。というか小ぶりの胸の膨らみが丸見えなくらい薄かった）を脱いで、そこから辺に脱ぎ散らかしてあった（見たまんまの意味だ。どうみてもお嬢様のすることではないだろう）自分の服を着ると、音もなく玄関から出ていった。

「おや、睦月ちゃんはもう帰ったのかい？」

お袋が台所から持ってきた膳をテーブルの上に置いていく。

……
はっ！ あまりの自然さにスルーしちまうとこだった！

「なんで台所にいたお袋が知ってやがる!？」

「ああ？ さつき睦月ちゃんが玄関から出ていったじゃないか。裕哉、アンタも気配の一つや二つ読めないと、この先生きていけないよ?。」

あの、母上？ 普通の人間は気配なんてまず読めないと思うんですがね……。つか、気配の一つや二つ読めないと生きていけない世界ってどんだけやべえんだよ……。

「あはは……」

ほら見る！ 美里の奴も苦笑いしてんぞ!？

「このナレーター面白いね!」

「テレビのほうかよ!! しかもそこ苦笑いするとこじゃねえだろっ!？」

「ん？ なにかおかしい?」

美里の奴は頭にハテナ浮かべて首をかしげてやがるし、お袋はお袋でしたり顔で笑ってやがるし! もういいや……と俺は膳に並べられた朝飯を見る。

今日は銀シヤリに味噌汁に焼き鮭に漬け物か。む……N A T T O H がないだつ!？

「お袋ー! N A T T O H がないぞー!!」

「あ？ 誰かさんがよく食べるから納豆は今切れてんのよ。なんなら、代わりにN A T O 弾を用意してやろうかい?」

「いえ、いりません……いただきます」

ライフル弾なんか食えつか!!

「ユウは本当に納豆好きだよねー。いただきまーす」

もぐもぐ……うむ、NATHには敵わないが焼き鮭もいい。
これぞまさしくジャパニーズ・ブラックファストって奴だな。

「ん？ そっぴいや今日も親父がいないな。仕事なのか？」

「うんにゃ、今日は休み。父さんは朝早くから釣りに行ったよ。運がよければ今日の夜は魚だねえ」

「ああ、親父は釣りが趣味だったな。一応期待しておきますか」

てな感じに朝飯を食っていると、いかにも「寝起きです」と言わんばかりに目をこすりながら二階から雪が降りてきた。

「ふあー……おふあーう……zzz」

「おはよう、雪。立ったまま寝るんじゃないよ。ほら、ご飯出てるからさっさと顔洗ってきな」

「ふあーい……」

お袋に背中を押されて洗面所に向かう雪。なんかヨタヨタしとるようだが……大丈夫か？

と、そんな心配の必要はなかったようで、面を洗ってさっぱりした雪が自分の席に座って元気に挨拶してきた。

「おはよー裕兄さん、みさちゃん」

「おはよう、雪。髪がボサボサのまんまだぞ。稜の家に行く前に直してけよ？」

「おはよっ、雪ちゃん！」

「はいよ、朝ご飯お待ちどう。なんだい？ 雪は稜ちゃんの家に行くのかい？」

「うん、お姉様が昨日の続きをしてくれるって……」

雪よ……何故そこで顔を赤くする！？ やっぱ昨日俺が帰ってくる前は百合ってたのかっ！？

「かつつか！ やっぱ若いモンはいいねえー。食べられすぎないように気をつけなよ？ 裕哉達は今日はどうするんだい？」

「そうだなあ……」

そっぴや遊ぶ約束はしてたが、なにをするかは全然決めてなかったわ……。どうすっかなー！

「うーん、今日は天気もいいし、散歩しながら街まで出ようよ」

ナイスアイディアだ、美里！

「おう、そうだな。てなわけで俺らは街で遊ぶわ。ごっそさーん」

「ごちそうさまでした、それじゃー僕は仕度しに一度家に戻るねお婆さん、朝ご飯ありがとでした！」

「あいよ、お粗末様でした。またいつでもおいで！」

「はい、それじゃお邪魔しましたーっ」

さて、俺も歯磨いて顔洗って自分の部屋に戻りますかね——と思つたら雪とお袋がこつち見てニヤニヤ笑ってやがる。

「あんだよ？」

「いやー、みさちゃんってホントいい子だと思ってねえ。裕哉、アンタ18になったらさっさとみさちゃんと結婚しちまいな。あんないい子、他にいないよ？」

「け、結婚って……あのなあ」

「駄目だよ、お母さん。みさちゃんには睦月先輩や高橋先輩という強力なライバルがいるんだから。一筋縄ではいかないよー」

ちよつと待てえ！ 睦月は分かるが俺と雅矢はそんな目で見られてるのかっ！？

確かに奴の行動はちと行き過ぎな面もあるが、周りからそう思われてたとは……。

「けっ、言ってる。俺は部屋戻るわ」

「はいはい。今日は一日中晴天らしいから、ゆっくり楽しんできな」

俺の背中では雪とお袋が、声は小さくだがまだ笑ってる。
なんとなく恥ずかしくなった俺は、さっさと歯を磨いて面洗って、わざと音を立てて階段を駆け上がって自分の部屋に戻った。

第9話『春風のアリス』

「おっせえなアイツ……何のんびりしてやがんだ？」

美里から「10時過ぎに家の前で待ってて」というメールをもらい、10時から家の前で待ってるが、そろそろ10時を20分を過ぎようとしている。俺が大人か、「サツだあ？ ハッ！ 上等だコラア！」ってな感じにバリバリの不良だったら足元に多数の吸殻が落ちてる頃だ。

ぶっちゃけ俺は性欲をもてあます……もとい、暇をもてあましていた。

右手でピースサインを作って煙草を吸う真似をしてたら誰かが美里の家から出てきたが、美里と背が同じくらいで、見た目年齢十代後半か二十代前半の女性だ。とりあえず美里の奴じゃねえことは確かだな。

「こんにちは、裕ちゃん。煙草は18になってからじゃないと駄目よー？」

その人は俺の姿を見るや否や、小走りで掛けてきて「めっ」って感じに人差し指を立ててきた。うーむ、テンプレ動作だけど可愛いよなあ、この人……。

「うつす、おばさん。いや、そこは嘘でも二十歳はたちって言つとくべきじゃないっすかねえ……」

「大丈夫よ。うちのお父さんも18からやってたし」

「さいですか……」

俺はそれだけ言って、ため息をついた。

腰くらいまである、脱色したみたいにきれいな栗色の髪をヘアゴムで一つに纏めて、家事の途中なのかうさぎ柄のエプロンを掛けているこの人の名前は神無月美恵子^{かんなつき みえこ}。苗字から分かるように美里の母親だ。

絶対そうは見えないが、年齢は今年で35らしい。ある日なんとなく聞いてみたら普通に教えてくれた。つまり、旦那さんと結婚して合体してすぐに美里が誕生したわけだ。おお、お盛んお盛ん。

雪と同じくらいの天然属性持ちなので、たまに言葉のキャッチボールしてるはずが思いつきり後逸したり、大暴投で隣の家のガラスをやっちゃったりするような人。あくまでも比喻だが、本当にやりそうなのがこの人の恐ろしい所だ。

ちなみに旦那さんは至って普通の温厚なサラリーマンだが、今日は休日出勤でいないらしい。まあ、こんな感じの母親と父親だから美里のような奴が生まれた……んだよね？

「男の子は黙って待つてあげるくらいの余裕を持たないと駄目よ、裕ちゃん。みさちゃんならもうすぐ来ると思うわ」

「そうっすかあ。アイツは仕度長いからなあ……」

「そうねえ。じゃあー、次は裕ちゃんにも手伝ってもらおうかなー？ みさちゃんもきつと喜ぶわ！ あ、ほら——みさちゃん、仕度出来たみたいよ？」

美恵子さんに言われた俺が目を向けると、美里の奴がおずおずといった感じに玄関から出てくるところだった。

「お待たせ、ユウ。ごめんね、遅くなっちゃって……」

「いあ、そんなに待つちやいねえよ。みさ……と？」

母親と同じように小走りで掛けてくる美里の全身を見て俺はそのまま固まった。

昨日のようなコスプレなんかじゃねえ、女の子の姿そのまんまの美里がそこにいた。

「うんうん、可愛いわみさちゃん」 やっぱり私の見立てに狂いはなかったわね。ほら、見て裕ちゃんっ！ 神無月アリスちゃんよ！ 可愛いでしょー」

「ど、どうかな、ユウ……」

「あ、ああ……可愛いぞ。すごく似合ってる」

俺は、薄く化粧もしているせいか、いつも以上に女に見える美里の姿を前にそれしか言えなかった。

明るい栗色の髪は首よりも長いミドルロングを少し大きめの黄緑色のリボンで飾ってて、春の芽吹きを思わせる薄い新緑色の太もも中丈のワンピースによく合ってる。まだ4月で肌寒いこともあってボレロ風の、レースで飾られた白いカーディガンを羽織っているがこれがまたいい。ソックスもワンピースが入った白のニーソで清楚さを際立たせてる。白い帽子があれば大人っぽい、ないから子供っぽさを残した大人っぽさを感じた。

実際に春風の妖精がいたらきつとこんな姿をしてるんだろう。俺はポーツと美里の姿を見ながらそんなことを考えていた。

「本当？ よかった……ユウに気に入られなかったらどうしようかと思ってた……」

「ばっか！ そんなこと言うわけねえだろ？ マジで可愛いっての

……アリス」

「あっ……」

きつと今の俺の顔は赤くなってるんだろう。照れ隠しに美里の頭

をくしゃくしゃに撫でてやった。

美里の顔も赤い。というか、美恵子さんの前で何やってんだ俺たち……。

「そ、それじゃ……いこつか」

「お、おう……そうだな」

「二人とも、いってらっしゃい」

にこにこ顔の美恵子さんに見送られて、街に向かって歩き始める俺たち。

……ここで終われば問題ないんだが、この人の場合は確実に――

「みさちゃんーん！ お母さん、みさちゃんが朝帰りしてきてもちゃんと暖かく迎えてあげるからね！ 昨夜はお楽しみでしたね、って

」

ほらきた！

おい、その天然系人妻！ 笑顔で問題発言すな！！

「え、えええっ！？ あ、朝帰りって……」

「子供は何人かしら？ 今から楽しみだわー」 ああ、幸生さん……

……子供達はこうやって親元から巣立ってゆくものなのね……！」

「……」

駄目だこの人妻。早く何とかしないと……。大体男同士でどうやってガキつくんだよっ！ 仮に美里が性転換して女になったとしても無理な話だぞ！？

「お母さん、ああなったら2時間は戻ってこないから……ほっといて、いこいこ」

「そうなのか……初めて見たわ」

美恵子さん、ある意味睦月のような人でもあるのか……。またひとつ新しい面が見れたな。

「ねえ、ユウ。手つないでもいい？」

「ん……」

身長差が10cmくらいあるので上目遣いに聞いてくる美里に、俺は黙って左手を差し出す。

「ありがとつ。やっぱりユウの手って大きいね」

——今のお前の手は穏やかな春の陽気みたいだな。暖かいよ。

思わず言いそうになったその言葉を寸前で飲み込む。自分でも不思議に思うくらい、自然に出てきそうで恥ずかしかった。

だから——

「そうか？ これくらい普通だろ？ んで、まずはどこ行くんだ？」

どうでもいい言葉で、そのうち喉から勝手に飛び出そうなその言葉に蓋をする。そして、いつもの調子の俺に戻るんだ。

「んー、少し公園によっていこうよ」

そうだな、昼までちよつとした花見を楽しむのも悪くねえ。

と、俺はそう思っていたんだが——

「あそこの屋台のホットドッグ、久しぶりに食べたくなっちゃった」

「ムードもへつたくれもねえなオイ!!」
「てへっ」

やっぱり、神無月アリスになっても美里の奴は美里だった！

第9話『春風のアリス』（後書き）

ようやく恋愛物っぽくなってきた感じですかね。
それでは次回、第10話『今日はデート日和也』
の場合、午前『お楽しみに！』
神無月アリス

第10話『今日はデート日和也』 神無月アリスの場合 午前 (前書き)

今回は美里^{アリス}視点です

まだ少し肌寒い風が吹く桜の並木道をユウといっしょに歩く。左手はユウの右手と繋いで、右手に食べかけのホットドッグを持ちながら。

ホットドッグはもう通り過ぎた公園に定期的に來ている屋台で買ったもの。最後に来たの1年くらい前だったっけ……久しぶりによつてみたんだけど、お店の人は僕たちのことを覚えてたみたいで「ヘイ！ お久しぶりネーおフタリさん！」って言うてくれた。こういうときってなんだか、わけもなく嬉しくなるよね。

それにしても、ワンピースの裾から風が入ってきて太ももと……ま、股がスースーする。うう……これならワンピースじゃなくて長めのスカートにしたほうが良かったかなあ……。でも、ユウは「似合う」って言うてくれたんだし少しくらい我慢しよう。

ホットドッグを包んでた紙を、通り道に置かれてたゴミ箱に入れて僕はユウの顔を見る。

僕の大好きな、ちよっぴり不良だけどすごく男の子らしくてきりっとしてるユウの顔。ぽーっと体が熱くなつてくのを感じながら見てたら逆にユウに見られちゃった。

「ん？ アリス。俺の顔に何かついてるか？」

僕のことをもうひとつの名前で呼ぶユウ。

『アリス』は僕が僕自身に対してつけたトランス・ネームだ。だけど、別に僕は自分のことを『アリス』と思ったことはないし、似てると思ったこともない。ただ、『アリス』という少女が好きな

んだ。その名前には無垢で可憐な少女ってイメージがあるから。きっと、僕もそんな子になりたかったんだろう。

「ううん。ユウの顔を見てただけ」

「あん？ 俺の顔なんか見ても面白くねえだろ……」

ユウがいつものようにぶっきらぼうに顔を桜に向ける。
違うよ、ユウ。

面白いとか、面白くないとかそういうことじゃないんだ。ただ、僕がユウの顔を見てたかっただけ……それだけなんだ。

ユウは嫌がってるかもしれないけど、今の僕はそれだけで十分幸せな気持ちになれるから。

「桜、きれいだな」

「そうだね」

しばらく桜を見ながら歩いてたユウの呟きに相槌を打つ。
今は五分咲きといった感じがな。つぼみと花が半々くらい…… 5
月になればすっかり葉桜になっちゃうんだろうな。

「少し、寂しいね……」

僕は思わず呟く。

「ん、何がだ？」

「桜がさ。あと1ヶ月もしないうちにピンクと白から緑一色に変わっちゃうんだろうな、って」

「そうだな……。でも、俺はそれはそれでいいと思うんだ」

「え？」

「桜ってのは花が咲いてるうちは見る奴の目を楽しませる。葉桜は

葉桜で見る奴の心を和ませるもんだ。癒しっーかなんっーか……上手くは言えねえけどよ……」

桜を見上げながら、空いてる人差し指でほっぺたをかきながら言うユウに僕は小さく頷いた。

「ふふ、上手く言えてたよユウ——きゃっ！」

突然吹いてきた突風に僕はユウから手を離して両手でワンピースの裾を押さえる。少し間があったけど見られてないよね……？

「み、見た……？」

「何をだ？」

「だから、その……僕の……パンツ」

「見てないぞ？」

よかった……見られてないみたい？ ほっとため息をついた僕だったけど——

「……………若草色のしましま（小声で）」

「ユウのばかぁー！！ やっぱり見たんじゃないかぁー！！」

「ぐぎゃあああああ——！！」

デリカシーのないユウのお腹に渾身の力を込めたパンチ一発！
なんか顔がにやけてたし、そうだとは思ってたよっ！

「ふ……やるなアリス。世界を狙えるいいパンチだった……ぜ……
ガクッ」

「はいはい。芝居はいいからさっさといくよ、ユウ」

「ガクッ」とか自分で言ってる時点で芝居ってバレバレじゃん……
ユウってホント演技が下手なんだから……。
そんなことより、ユウにパンツ見られちゃった……顔が赤くなっちゃってユウの顔まともに見れないよぉ……どうしよう。

「チツ、ばれてーら」

全然痛がってない様子で立ち上がるユウと再び歩き始める。

今までとひとつだけ違うのは、僕がユウを見れないことだけ……
それだけなのに、なんだか寂しい気持ちになる。

なんかやだな、こんなの……。

いつか僕はユウに抱かれたと思ってるし、パンツ見られたくらいでこんなになってちゃダメだよ……よし！

「ねえ、ユウ」

「ん？　なんだ……」

「さっきのことは許してあげるから、キスしてよ」

気づいたら——自分でも信じられないくらいに大胆な言葉を僕は吐いていた。

今までここまで大胆になったことなんてなかった。せいぜいユウの腕に抱きついたりくらいだ。

でも、ユウのことだから「恥ずかしいからやんね」とか言っしてくれないんだろう。

そう思ってた——

「しょうがねえな——」

「え、ユウ？」

でも、ユウはめんどくさそうに後ろ髪をかきあげながらも歩く足

を止めて僕に顔を近づけてきた。ここまで来ちゃったら今さら「やめて」なんて言えない。覚悟を決めて僕は静かに目をきゅって閉じる。

何も見えない暗闇の中、自分の心臓の音だけがとても大きく聞こえる……とくん、とくんって。

「んっ……？」

そつと触れる柔らかい感触。でも、それを感じたのはくちびるじやなくてほっぺただった。

「こ、これでいいだろ……さっさと行くぞ！」

熱におかされたような僕の顔も赤いけど、ぶっきらぼうに僕の手を取って歩き出すユウの顔も少し赤くなってる。

そんなユウを見て、僕はくすつと笑って――

「もお……ちゃんとしてくれなかったから今日のお昼はユウのおごりだよっ」

そう言ってやったら、ユウも笑い返してくれた。

やっぱり、こうやってユウの側にいるのが僕にとって一番の幸せ。携帯電話で時間を確認すると11時半。今日という日はまだまだ始まったばかり。

ユウとめいっぱい楽しんで、ときどき甘えて、とにかく楽しい1日にしよう。

公園の桜の並木道を抜けた僕とユウは、今度はゲームの話をしながら街に向かった。

第11話『今日はデート日和也』 神無月アリスの場合』 午後』 (前書き

今回も美里^{アリス}視点です

「おいしかったねー」 ユウ

「確かにうまかったが……当分あの店の近くは通れねえぞ……」

「う……悪かったってばあ」

あんな目立つようなことしちゃったもんね……その時のことを思い出したら……うう、僕も少し恥ずかしくなってきたかも……。

——街に着いたら12時ちょうどになつたので、僕たちはお昼ご飯を食べることにした。何を食べるかは少しだけ揉めたけど、街で一番美味しいと評判の洋食屋さんのオムライス。僕は冗談で言つたつもりだったんだけど、ユウがおごってくれるって言つたから甘えることにした。

お店は少しだけ混んでたけど待たされることもなくすぐに座れて、注文してから30分くらいで卵はふんわりとろーり、中のチキンライスはほっかほかの具たくさんオムライスが運ばれてきた。卵で出来たお家ごと中のチキンライスを口に入れるとふんわりとろーりのほっかほか。うーん、美味しい」

ユウも向かいで舌鼓を打ちながら食べてたけど、食べるのに集中してるみたいでお話してくれない。そのうちに少しだけ悪戯心が沸いてきた僕はオムライスのスプーンをユウのほうに向けてやったんだ。「はい、あーん」って。

最初は戸惑つてたユウだったけど、僕が一步も引かないことを知ると観念して食べてくれた。そしたら——仕返しのつもりだったのかな？ ユウも同じことをしてきたんだ。もちろん、僕は喜んで食べたよ。なんだか、自分のを食べるより美味しかった」

そんなことをお互いに繰り返してたらいつの間にか白い皿だけになってて、気づいたら店員さんもお客さんも白くい目でこつちを見てた……。あはは……。ここはファミレスとかじゃなくてただの洋食屋さんなんだから当然だよな。場所を考えないと、だね。

そんなわけで、勘定してそそくさと出てきた僕たちは、今デパートの洋服売り場を歩いてる。

「あ！ あれなんかユウに似合うんじゃない？」

「ほう、どれどれ……………オイ……………」

僕が指さした服を見るユウ。しばらく時間が止まったようにフリーズしてたけど、気づいたら頭に拳骨落とされてた。それなりに痛い……。

「なにすんのさー！」

「なんで喪服なんだよ！ しかも女の着物じゃねえかー！」

「えー。ユウってほら、海外の映画やドラマでよくあるじゃないか。お葬式で女の人が黒いワンピースみたいなドレス着て、顔をメッシュのような黒布で隠してるの。ああいうの似合うと思うんだけどなー」

「いらね……………」

ユウのお気には召されなかったみたい。似合うと思うんだけどなー。ユウってスタイルから黒とかすごく似合いそうだし、和服でも洋服でもいいけそう。

『未亡人／＼水無月裕哉／ 美丈夫の乱れた喪服』——ってこれじゃある種のスケベDVDじゃん。なに考えてんだる僕……。でも、少しいいかも……。あふん。

「それより、服を試着しにきたんだろ？ どの店なんだ？」

「あ、そうだね。この近くだからいこつ」

と、僕がユウの手を引いて行きつけのお洋服屋さんに向かおうとした時だった――

「おや？　裕哉君に神無月君ではありませんか。奇遇ですねえー」

え？　この声まさか……。

聞き覚えがある声に僕とユウが振り返ると、そこに紅葉色の生地
に何の花かは分からないけどキレイな花の柄の着物を着た美人さん
が立ってた。あれ？　高橋くんの声が聞こえた気がしたんだけど……
…気のせい？

僕とユウが顔を見合わせていると、その美人さんはニツコリ笑って手を振ってきた。

「私ですよ、雅矢です。まあ、今は『桔梗』とお呼びください。神無月君は今は『アリス』でしたっけ？」

「声は分かったんだけど、すごい美人さんだから高橋くんって分からなかったよ。うんうん、今は『アリス』って呼んでねー！　僕も『桔梗』ちゃんって呼ぶから」

それにしても、桔梗ちゃんすごいなあ。着せられてるんじゃないなくて、もう何年も前から女性の着物を着こなしてるって感じで男性的なところはひとつも見えない。ウィッグや化粧も和装に合わせてるし、すごくイイ♪

「え？　雅矢、なのか……」

ユウはまだ信じられないようで、目を点にしている。

「はい、雅矢ですよ。実は、私の祖母方の家が呉服屋でしてね。遊びに行くたびに着せ替え人形にさせられているうちに病みつきになりまして、暇な時はこうやって女装しているのですよ」

「おいてめえ……言いながらジーパン越しにひとの息子を撫でてんじゃねえよ!!」

「ははは、これは失礼。ついucciかり裕哉君のモノを愛でたくなりまして。ところで、お二人はデートの真っ最中でしたか?」

「ちが——」

「うん、そうだよ。だから、邪魔しないでね? 桔梗ちゃん」

ちがう、なんて言わせないもんっ!

「はっはっは。それはそれは……馬に蹴られないうちに退散したほうが良さそうですね。それでは、私はこれで失礼しますよ」

くるりと背を向けてエスカレーターで下の階に降りてく桔梗ちゃんが見える。なんだか、歩き方も和服のときの歩き方に合わせてるし……キレイに決まってるなあ。

まっ、それはいいとしてっ!

「それじゃ、いこ! ユウ」

「お、おう……ンなに急がなくて店は逃げねえっての!」

「あーあー聞こえないい」

僕は聞こえない振りをしてユウの手を引いて、そんな遠くないお洋服屋さんに向かって歩き出した。

——行きつけのお洋服屋さんでファッションショー（大きいサイ

ズも扱ってるお店だから嫌がるユウもいっしょに♪もどきをやって、食べ物フロアでデザートを食べて、ゲームセンターで遊んでデパートから出たら、もう外は茜色に染まっていた。

桜の並木道を歩いてた時間よりも冷たい風が、白い春用のボレロ風カーディガンと髪をはためかせては通り過ぎていく。

「ふう、今日は楽しかったな！　なんか色んなものが見れたし、失ったものも多い気がするがな……」

「そうだねー。でもカッコいくて可愛かったよ？　ユウのゴシックドレス姿♪　やっぱり、ユウは黒が一番だねっ」

「そっかぁー？　まあ、アリスが喜んでくれたならそれでいいが……そろそろいい時間だし、帰るか？」

ユウに言われて携帯電話の時計を確かめる。時間はもう午後6時になるうとしている。

でもね、ユウ……僕^{みたく}にとっての今日はまだ終わってないんだよ？

「公園……」

「ん？」

「少しだけ、公園によりたいな……」

ユウは少しだけ考えたみたいだけど、すぐに顔を上げて笑いかけながら「いいぜ」って言うてくれた。

これからは睦月ちゃんも、そして多分……高橋くんも今までよりもずっとユウに絡んでくるだろうし、こんな機会はまだあまりないかもしれない。

だから、ユウに伝えるんだ。僕の、今の気持ちを――。

こうして、僕たちは夕陽の光に追われながら桜咲く公園に向かった。

第12話『黄昏ときの告白』（前書き）

今回もやはり美里視点です

第12話『黄昏ときの告白』

「…………はぁー」

ますます冷たくなってきてる風に身をふるわせながら自分の手があっためる僕。姑息ではあるけど、何もしないよりはマシだと思う。ユウは近くの自販機に飲み物を買いにいつてる。もう少ししたら戻ってきてくれるはず……。

「寒いね…………」

言葉にするとますます寒くなった気がする…………。でも、これは多分体だけじゃなくて心も冷えてきてるから…………。

まだかな、ユウ…………早く戻ってこないかな。

「…………」

ダメダメ！

こんな状態でユウとなにを話せるって言っの？

しっかりしろ、神無月美里。いつもの調子を思い出して！ ユウ

が戻ってきたら言うんだ！

深呼吸深呼吸——すうはぁ、すうはぁ…………うん、落ち着いてきた。

「…………」

僕は西の空のかなたに少しずつ姿を消していく夕陽を眺めながら、

新緑色のワンピースの裾を直してベンチに座りなおした。

キレイな夕陽は好き。でも、キレイな月はもっと好き。

お月さまを見るたびに穏やかな気持ちになるから。今日もあと2時間もすれば夕陽は完全に沈んで、白いお月さまが顔をのぞかせるんだろうね。

——って、ぼんやりしながら夕陽を眺めてたらほっぺたにあったかいものを押し付けられた。

「ひゃあっ!？」

「なーに黄昏てんだ？ ほれ、ココア」

「あ、ありがと……」

戻ってきたユウからホットココアの缶を受け取る。ユウが隣に座ったのを見てからプルタブを開けて一口飲むと、ココアの優しくて甘い味が広がって少しだけ体があたたかくなった。

「きれいな夕陽だなー」

缶コーヒーを飲んで夕陽を眺めるユウ。そんなユウを横目で見る僕は、彼のなんでもない動きが気になって仕方なくて――

「うん、そうだね。ホント、キレイな夕陽……」

そんな当たり障りのない言葉でお茶をにごしてしまう。

「……」

黄昏に暮れる無言の公園。近くには他に人どころか猫一匹さえいない、完全に僕とユウだけの空間。チャンス……だけど言葉が出てこない。心のなかに浮かべた言葉を声にしようとしても、結局出せ

なくて元の場所に引っ込んでしまう。

「なあ、アリス。なんか話あるんだろ？」

ユウが僕のほうを向いて言う。

「……………うん。だけど、もうアリスの時間はおしまい。これは美里としての気持ちだから」

僕はたつぷりと溜めを作ってから頷いて言った。

「……………そか」

ユウは何も聞かないで、ただ頷いてくれた。

でも、相変わらずユウは意地悪だね……………こんなときの僕がどんな話をするか知ってるくせに。ユウがそれを分かってないはずがない。長い付き合いだもんね。

だけど、こうやっていつもユウを振り回して困らせてる僕もいけないよね…………。だから今日——いまここで、はっきりと言おう——。

「ユウは……………」

「あん？」

「僕のこと、好き？」

「いきなりナニ言ってるんだ？　好きに決まってるだろ？」

ユウは迷うことなくそう言うてくれた。それが、ユウの偽りのない本心ということは分かる。でも——

「それは……………友達としてでしょ？」

「……………」

こんな言い方ずるいと思うけど……僕は馬鹿だからこんなことしか言えない。

知ってるよ、ユウがこういう恋愛に興味がないことくらい……。幼稚園からの、長い付き合いだもん。

ワンピースの裾を握りしめながら、僕はユウと真正面から向き合った。

「僕はユウのこと好きだよ。家族も雪ちゃんも睦月ちゃんも高橋くんも好きだけど、世界で一番ユウのことが大好き！幼稚園の頃から気になって、小学校で好きになって、中学校でもっと好きになって、高校でもっともっと好きになって——今になって、やっと言えたんだ……！」

そう、やっと言えたんだ。心の底に閉じ込めておいた僕の気持ちを。

だから僕は——

「美里。俺は——」

今はこれで満足、とユウの唇に人差し指を当てて先を言わせない。

「言わないで、ユウ。今すぐ返事がほしいって言ってるんじゃないんだ。今日は僕の気持ちを伝えたかったただだから。だから今は——」

僕は戸惑うユウに顔を寄せて、なにかを言おうとしているその唇を唇で塞いだ。

「んっ……」

生まれて初めてのキスは大人っぽくちよっぴり舌を入れてみたりして、たったの10秒くらいだったけど甘い甘い時間に満足した僕はゆっくりとユウから離れて、

「——今はこれで十分幸せ。これが、僕の素直な気持ちだよ、ユウ
っ」

僕は今日一番の笑顔を見せて、ユウの胸に飛び込んだ——。

——裕哉と美里、共に二人は周りには他に誰もいないと思っていた。だが、それを終始見ていた目が遠くにあった。

「……」

銀色の髪は尾が長めのツインテール。しかし銀髪には合わない、そのまま社交パーティに赴けそうな赤色のワンピースを着て、目元をサングラスで隠した怪しい姿の少女がそれを見ていた。

偶然か必然かは分からない。だが、確かに少女は見ていた。裕哉と美里のキスシーンを。

「ナツキお嬢様！ 探しましたぞ！」

後ろから駆けてきた執事風の老人に、少女は振り向いてすぐに声を掛ける。

「ねえ、ゲンゴロウ」

「はい、なんですかな？」

「あのふたり……誰か知ってる？」

少女の目線と同じ方向に顔を向けて、『ゲンゴロウ』と呼ばれた老執事は僅かに目を細める。

「あのお二方ですか？ ……おお、男性のほうは水無月裕哉様ですな。女性のほうは……状況と髪型から察しますに神無月美里様と思われます。どちらも睦月お嬢様のご友人にございます」

それを聞いた『ナツキ』と呼ばれた少女が、誰かを思い浮かべて嘲笑するような笑みを浮かべた。

「ふーん、あのヘンタイお姉さまにあんな友達がいたんだ。ユウヤとミサトかあ……覚えておきましょう」

「ナツキお嬢様……実の姉君をそのように言うものではありませんぞ。ささ、大分冷え込んで参りました。これ以上はナツキお嬢様のお体に障ります。お屋敷に戻りましょうぞ」

「ゲンゴロウはいちいちうるさいなあー。ま、これ以上ここにいても仕方ないみたいだし、もう帰りましょ」

「左様でございます」

（なかなか面白そうなふたりだし、ちょっとお姉さまに聞いてみようかな？）

歩きながら『ナツキ』は楽し——否、愉しそうに笑う。そんな『ナツキ』を見て深いため息をついた『ゲンゴロウ』は見えない位置から裕哉と美里に一礼し、踵を返して老人とは思えない俊敏さで少女の後ろに従った。

第12話『黄昏ときの告白』（後書き）

裕哉とアリスのデートはこれで一先ず終わりです。

次話からは再びコメディパートに入ります。

『ナツキ』は今回は顔見せだけです。今後どう絡んでくるかは今は皆様の想像にお任せします。果たしてそれが合っているかどうかは後のお楽しみ。

第13話『Oh! SAKЕ!!』 準備は怠りなく』

次の金曜日。

今は授業中だが世界史担当の帝星先生が「よし、諸君！ 授業はここまでだ！ 残った時間は各自好きにするが良い。フハハハハ！」「と言ったので、いつもの4人で話をしてたときのことだった。

「そうだ——」

「京都に行こう」

おいおい……返しは悪くなかったが雅矢の奴が困った顔をしてるぞ、美里よ。

「俺は京都に行くぜ。誰がなんと言おうとな」

いいからさつさと行け！ つか、睦月……お前がやると絶望的に合わねえから。なんつーか……京都に向かったはずが、気づいたら稚内にいるような感じだわ、うん。

「ははは、それもいいですが明日から週末ですし、みんなでお酒飲みませんか？」

ほう、お酒とな。そういえば、最近あまり飲んでなかったな。

未成年の癖して最近とは何事だ！ とは言わないように。それに、君たちの世界と違って軽アルコール飲料なら18歳から飲んでもよいのだよ。ハッハッハ！

……あと1歳足りないだろ、という突っ込みはナシな。

「明後日の方向を見て一体何してますの？ 裕哉さん」

睦月の冷静な突っ込みが入る。どうやらウケなかったようだ。

「なんでもねえよ。それより、久々の『Oh! SAK E! !』というわけですか？ 雅矢殿」

無駄に時代劇に出てきそうな悪代官顔をする俺。

「ええ、『Oh! SAK E! !』です。それに、あと2週間もすればGWでしよう。^{ゴールデン・ウィーク}その時の計画も立てたら良いと思ひまして」
「なるほどな、俺はいいぜ！ 美里と睦月はどうか？」

俺がふたりのほうを向くと、何してんだか……美里と睦月はお互いの頬をつねり合っていた。俺の視線に気づくとすぐにやめて姿勢を整えたが、お前らホント仲いいな。

「特に予定もないし、僕はオツケーだよー」

いつもの調子でオーケーサインを作る美里。

あときはあんなだったのに俺も美里も気にしないでいつも通りの日常を過ごしてる。

いや、きつといつも通りじゃないんだろう。それを表に出してないだけで。

「わたくしもですわ。秘蔵のお酒を持参致しますわね」

手首に包帯が巻かれた手で髪をかき上げながら言う睦月。

昨日家で怪我したときのものらしいんだが、「なんでもありませんわ」と本人が言ってるから大したことではないんだろう。

それにしても睦月秘蔵の酒か……なんか嫌な予感しかしねえんだが？ それでも一応聞いてみますかね……。

「ちなみにどんな酒なんだ？」

「それはもちろん決まっていますわ。アルコール度数100%の——」

——このとき、俺は気づいてなかった。俺たちの背後に誰かが立ったことを。

「それはタダのエチルアルコールだろうがああああ——！？」

ここが教室なのも忘れて叫ぶ俺だが、周りの3人どころか他の連中まで静まり返ってやがる。

よくよく見れば、『奴らは言っている。後ろを見ると』。

それに気づいた俺が大きな影に後ろを振り向くと——

「ほほう……貴様ら、おれの前で酒の話とはいい度胸だな？」

「げえっ！ 帝星先生——！」

ジャンジャンジャン、ってな効果音が今にも聞こえてきそうだが、今はそれどころじゃねえ……。やっべえな……どう言い訳すっかな。

と、思ってたたら雅矢が妙に真剣なツラしながら帝星先生に抗議？し始めた。

「それは誤解です、帝星先生。私達はお酒の話をしていたのではなく、『Oh！ S A K E——！』の話をしていたのです」

「ほう、『Oh！ S A K E——！』とな。では、高橋。その『Oh

！ S A K E ！』とやらを説明してもらおうではないか」

「はい。『Oh！ S A K E ！』とは、とあるアメリカ人が『まあ！ なんて見事な鮭！』とランカー級の大きさに驚き、感謝しながら食べたのが始まりで、明日私達もそれに倣って大きい鮭を4人で分けて食べよう、という話だったのです」

なんという嘘八百！ よくもまあそんなベラベラと出てくるものだ。ある意味関心しちまうぜ。

「ほう……」

しかし感心したように何度も頷く帝星先生。まさか雅矢のデタラメ話を信じたのかっ！？

「まあいい。貴様ら、酒の話をするのは結構だがここは学校で今は授業中だ。もう少し小声で話すが良い。あまり酷いようなら罰として帝星十字陵の建設を手伝わせるぞ」

デスヨネー。

ちなみに帝星十字陵は、この国一の建設会社『帝星建設』が総力を上げて建設中の建物だ。建物つか、俺たち庶民では顔も拝めなようなお偉いさんの墓らしいが詳しいことは知らん。

「じゃ、続けるか。場所は前みたいに俺んちでいいか？」

帝星先生が教卓に戻ったのを見て『Oh！ S A K E ！』の話を開する俺たち。さっきより少しだけ小声で。

「いいんじゃないかな。僕は賛成♪」

「わたくしもかまいませんわよ」

「私事です」

前回もそうだったが特に反対はなかった。

となると今日は全員泊まりだな。美里と雪にも手伝ってもらって、2階の客間を少し片付けておくか。

——帰ってからこのことをお袋に話したら二つ返事で了承された。前ンときもそうだったから予想はしてたが。

睦月と雅矢が何本か持ってきてくれるらしい（睦月に関してはエチルアルコールは持ち込まないように釘を刺しといた）がそれじゃ足りないだろう、ってことで酒の用意もしてくれるようだ。

それを聞いてた雪もメンバーに追加。前はまだ15ということもあって参加させなかったが、16だしそろそろいいだろう、というお袋の一声で今年は参加してもいいことになった。ま、そうとくれば一緒に地獄を味わってもらいましょうかねえ……フフフ。

だが、このときに俺は気づくべきだったんだ。

普段騒がしいお袋が静かに笑ってたことに――。

第14話『Oh! S A K E! ? 』 飲んで食べて飲んで吞まれて 』

2階の片付けと宴会の準備が終わり、そして夜になった。

『かんぱーいっ! !!』

さあさあ今年も始まりました、楽しき宴の刻『Oh! S A K E
! !!』。

今宵は皆様がどのように乱れるのか、それは見てのお楽しみです!
いやまあ……俺としては乱れてほしくないんだが、去年もアレだ
つたし無理だろうなあ……。

「このお酒美味しいね、ユウ!」

と、ご機嫌な様子の美里が飲んでるのはスクリュードライバー、
カクテルの一種だ。

他の連中もカクテルやビールといった低アルコールのものを美味
そうに飲んでいる。

お袋に釘をさしておいたから今日この場にある酒をどれも低アル
コール飲料……のはずだ。雅矢と睦月が持ってきたはずの酒は、お
楽しみってことなのか、俺の目に見える範囲にはない。

「お酒だけではなく、お料理もとても美味しいですわ。どなたがお
作りになったんですの?」

「あ、それは私とお母さんで作ったんですよ。睦月先輩」

アスパラガスのベーコン巻きに舌鼓を打ちながら聞く睦月に嬉しそうに答える雪。

そいえば雪は途中で抜けてたっけな。料理の手伝いに呼ばれてたってわけか。

「ふふ、これでしたらいつでも菫さんのお嫁さんになれますわね。雪さんは」

「え……あ……や、やだあ睦月先輩ったら……お姉様のお嫁さんなんてまだ早いですよ」

睦月のからかいに一瞬で顔を真っ赤にする雪。うむ、その様子はとても可愛いぞ、我が妹よ。

「いやあ、美味しい料理に美味しい酒、そして綺麗な女性。今宵の酒宴は楽しいですねえ！。はっはっは」

先生ー！　ここに親父がひとりいます！

あれだな……クラブとかキャバクラとかで女侍らしてるところの成金野郎って感じだな、今の雅矢は。

おっと、知らねえうちに結構なペースで飲んだのか急に催してきやがった。

俺は隣で鶏の唐揚げをつまんでた美里に少し席を外すと声を掛けて宴会部屋を出た。

うー、便所便所！

――15分後。

「チッ、親父のせいですっかり遅くなっちまったぜ」

たくよお、あのクソ親父長すぎんだよ。便所で新聞なんか読んでんじゃねえよ！

さて、あいつら大人しく飲んでるかな、とふすまを開けると――

「はあー……このお酒おいひいれすわ。しやすが我が家にあつた秘蔵のお酒れすわあ」

「いいにやあ……睦月しゃん。僕にも少しちょうらいー！」

「いいれすわよ。はあい、どうぞお」

「にやはは！ 睦月しゃん、いれすぎい！ こぼえてるよおー」

「あらあ……まあ、いいれしようー」

「……………どうしてこうなつたっ！ー！」

そこら中に広がつてゐる強い酒のにおい――これはもしかしてブランドーか？ さっきまで健全だつた光景はどこにいったのか、そこはある意味地獄だつた。

睦月と美里の奴は酔つ払いながらコップになみなみと注がれたブランドーを飲んでやがるし……あーあ、ンなに飲んでリバーズしても俺は知らねえぞー？

雅矢の奴はというと――巻き添えをくわないように少し離れた位置で熱燗を飲んでやがつた。いつの間にか雪も雅矢の隣に避難してて一緒にちびちびとやってたりしてる。まあ、賢明な判断といえよう。

ともあれ雅矢はまだシラフのようだな。

「おい雅矢。一体なにがあつたんだ？」

「ああ、裕哉君。戻りましたか。どうも、おばさんが用意してくれたお酒の中に一つだけ強いのが混じつていたようですね。で、神無月君がそれに気づかないで飲んでしましまして……。次に九条院さんがそろそろいいでしょう、ということで自宅から持ってきたブランドーを取り出して飲み始めまして、それでこの様です。ちなみに

私がつけてきたのは日本酒です。裕哉君もどうですか？」

「お、おう……」

まだ使っていない猪口を取ると雪が徳利を傾けて酌してくれる。それを一気に飲み干すと、これは……酒に詳しくない俺でも分かる。上等な日本酒だ。

「うまいな。で、美里が間違って飲んだ酒はどれだ？」

「そこに転がってるよ、裕兄さん」

雪が指差した空き瓶を拾って、貼ってあったラベルを確かめてみる。

なんだこりゃ？ ジュースみたいなジュース？ ジュースじゃねえのか？

瓶の口に鼻を近づけてみると、なるほど……確かに酒のにおいがあるな。ん、待てよ？ このにおいは……ラム酒か！

「ラム酒をジュースで割った奴だな。ったく……ロシアンルーレットじゃねえんだから——のわあっ!!」

お袋——!! と、叫ぼうとしたが突然抱きついてきた酒くせえ奴に邪魔されてしまった!!

「ユウ……。しょんなどこにいないでえ、いつしよにおしゃけ飲もうよあ〜」

俺の口に酒が入ったコップを近づけて無理矢理飲ませようとする酔っ払い1号。

「だあー! マジ酒くせえ! 離れろっ!」

「あらあ、裕哉しゃんいつ戻ってきたんれすのお？ 美里しゃんなんかよりの、わたくしといっしょにのみましょ」

逆サイドから抱きついてくる酔っ払い2号。つか、こいつらマジで酒くせえ！ 気のせいかな息苦しくなってきたぞ……。

「らめえ！ ユウはあ僕といっしょに飲むのおー！」

「裕哉しゃんはわたくしと一緒に飲むんれすのよ。美里しゃんはひいれくらさいなー！」

「むーっ！ 睦月しゃんこしょユウからはなりえてよおー！」

「い・や・で・す・わ」

「——う！？」

何を思ったのか、睦月は酔っ払いには見えない速さでブランデーを口に含めると、そのまま俺に唇を重ねてきた！

開かされた口から直接流し込まれるブランデーが俺の喉を焼く。口の中のブランデーを全て流し終えても睦月は離れようとしな。引きはがそうとしてもタコの吸盤のようにくっついて離れない！ このままだと窒息しちゃうっ！

「ああーっ！！ にやにしてるのお！ 睦月しゃん！！」

美里が呂律の回らない声で抗議しても睦月はまだ離れようとしな。い。い、息が……そろそろマジでやばくなってきた……。

「モテモテだね、裕兄さん」 あ、高橋先輩。もう一ついかがですか？

「ははは、見てる分には楽しい光景ですねえ。おっとと、ありがとうございます。水無月さん」

「どういたしまして」

仲いいなお前ら！！　つか、高みの見物決めこんでねえで助けるよー！！

ああ……もう駄目だ……意識が………――

「んぷはあ……おいしかったれすわあ。あらあ？　裕哉しゃん？」

――後日、雅矢の話ではこの後ふたりともぶっ倒れて、お袋の手で今日の寝所に放り込まれたらしい。

チーン――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3069y/>

俺の周りは変と恋ばっか！

2011年12月3日19時52分発行